
召還者の異世界奮闘日記

銀野 臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召還者の異世界奮闘日記

【Zコード】

Z8852Y

【作者名】

銀野 臨

【あらすじ】
家でテレビを見つづくつらいいたら、きなり異世界にトランプした翔子

なんやかんやで1年たちこつちの世界にも慣れてきて元の世界に変える方法を探しつつ平穏な生活を送っていた しかしある1人の訪問者によって平和な生活に崩壊の兆しが・・・?

プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です
ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです
お世汚しにしかならないと思うんですが読んでくださったなら幸いで
す！

プロローグ

タイムマシンがあつたらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かつた私はなんて答えたのかは思い出せない

「あつと漢字テストの前がいいな～えへへ」というようなことを言つていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないがもしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

私は大声で叫ぶ。

こんなにヒックリマークつけてしまふのなんてこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

「JRはアネット食堂」

小さな町へエリックの隣にある小さな食堂た

なると紹人的な心しさはある

だつて大脤わいなのに店員が私を含めて4人しかいないのだ。
今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾つてもらう前は3人で切り盛り
していたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

1年前、私はこの世界にやつてきた。

その口もこつもと回りじゅうに過りしていったのだ。

訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作らうかな～なんて考えながらだらだらとテレビを見ていた。

つたのだ。

普通異世界トリップする時つて神様が現れて〜みたいなくだりがありそだがそんなもん無くいきなりトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空氣読めていなかつた。

場所はアネットさんの家。そこはいいと思つ。人の家だしよく小説に出てくる森とかじやないし。

しかし！タイミングが悪かつたのだ。その日はアネットさんの娘さんのお葬式の日だつた。しかも弔いの儀といつ家族以外は絶対に立ち入つてはならない儀式の最中に。

空氣を読めないにもほどがあると思つ。

幸いといつていいのかはわからないがその時そこにいたのは娘さんの家族であるアネットさんとアネットさんの一人目の息子のドミニクさん、2人目の息子のアドルフくんしかいなかつた。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なんでも弔いの儀は家族以外は入れないよう結界を張るらしい。なのに私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後口言つていた。

まあ私もそれに負けないくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。

私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに落ち着いてねーよつてくらい落ち着いていたのだ。なので周りを觀察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまつた結果ある考えに至つてしまつた。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？あの違う世界にレッジゴー！あのジャンル・・・

い、いやいやいやアレは小説の中だけだつて！ありえないありえない
いやでも固まってる人たち田の色と髪の色がありえないくらいカラ
フルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしき
ものが浮いていたのだ。空中に、フワーッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がつたつたのを今でも鮮明に覚えている。
そして私は震えながら質問した。

「ユリはどうですか？」

記憶喪失者かつてツツコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

私の「**「」」**発言でアネットさん達3人は我に返つたようだつた。

固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だつた。なんとまあ我に返つたドミニクさんがナイフらしきものを懐から出したんだよね。

あはは・・・やっぱり普通に懐に刃物入つてる時点で日本じゃないよなあ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。

私がこんなくだらないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げる。余計なことはするなよ? 血は見たくないからな。」

もちろんソックロー挙げますよ手。だつて怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。

そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛りうと棚から繩を取り出していました。

しかも結構太めの繩です。紐とは間違つても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばSです。うん要らない情報ですね。そ、う、これも現実逃避です。

つてまた変なこと考えている間に田の前に繩がつ! つか私つてさつきから変なことしか考えてないな!.. しうがないかこの状況が変だもんね!..

あーでもやつぱり嫌だよこんなのは。大人しくしてたほうが良いだろ
うけどやつぱ嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけ
ない訳さーそんな趣味は無いんだよー！

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着い
てたのにね。グスッ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。う
ー人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスッ。

つて泣いても無視かよ！この男は！？か弱い？女が泣いてるのにシ
カトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜ヤ
ローがあああああー！！！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。
そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミーク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」

凛とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたしどミークさんを内心のし
る事と逃げる方法を考えることに必死だったのー瞬誰が言つたの
かわからなかつた。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて
思つてなかつたので空耳かと思つてしまつたのだ。

「でも母さん！結界を張つてゐるのに中に入つてくるなんてありえな
いだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないなんて」

しかし目の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて……。いい年した大人が何やつてるの。」

女人が言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子つて私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た目も魔法で変えてるのかもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かにじもつともですけどそんなことはありません。

「うるさいよ！もう20年近く食堂やつてきた私をなめんじやないよ！悪いやつかどうか見極める田ぐらに持つてるわ！…それとも母さんを信じられないの！？」

とうとう女人が叫ぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女人の勝利のようである。

言い終えた女人は私のそばにやつてきて微笑みながら言った。
「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさつきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いつきり泣いてしまった。

「ほい、これ飲みな。体が温まるから。」

「ありがとうございます。」

かばつて貰つて大泣きした私はその後口アラしき飲み物を飲んでました。

なぜ「らしき」がつくるかといつと見た田も香つも口アなの味が「ヒー」という摩訶不思議な飲み物だつたからです。絶対甘いと思つてたのに…苦かつたよ「ノヤロー

「それであなたはどうからでいつかに来たんだい？」

わざアネットと名乗つた女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を…

まあそこは氣になるよね普通。やつぱ正直に答えるしかないよなー
私嘘下手だし。へんに嘘ついても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来てきました。」

正直に答えてみた。そして思ひ。

これ自分だったら警察に突き出されわーと…。怪しこじこじの上ないよ！

「二ホンヘビーだいそこは？初めて聞いたよそんな国ね。」

やつぱり聞いたこと無いんですね・・・。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどさう実際にいわれるときついモノですな。

ああ・・・トリップ小説読むのは好きだつたけどな。体験はしたくないよ。

「あの・・・ここはなんていう国ですか？教えてください。」

99・99999%確信しても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだよとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバントイエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。

ここは異世界です。

だつて私はいたつて普通の高校生だつたから大陸で一番大きな国の人前くらいは知つてゐる。でもフェルバントイエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバントイエ・・・。そうですか・・・。すみません私いまから突拍子も無いこと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ・・・とゆ一ことで異世界からきたつてことを話してみようと思う。だつて私が知つてゐる人はここではこの人たちしかいないだらうから。さつきも言つたとおり私は嘘が下手だから本当のこと言つしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。

話すと決めたけど一応話す前に許可を取つてみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言つつもりだ？」

鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さっきから全然触れてなかつたけどこの人ずっとといましたよ。んでずっと私を睨んでました。親の仇つてぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。このこと考えるよりアネットさんと話すほうが有意義だしね！ あともう一人の男の子もずっといます。この子はさっきから私をガン見してて。穴が開くんじゃないかってくらい見てます。そして一言も発さない。謎な子だ・・・。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもうえそうに無いから先に確認をとつてみたんですけど・・・。」

言つてもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」

アネットさん！ あなたマジで女神です！ ああ・・・アネットさんがいなきにトリップしなくてよかつた。そしたら普通に縄で縛られ「ースだつたもんね。本当に感謝です。

「えと・・・じゃあ話させてもらいます。どうやら私の世界とは

違つ世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固った。

「・・・はあ？違つ世界だと？何を言つてゐるんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだと！？自分でもそう思つわつ

「私だつてそう思いますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティ工なんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思つのか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかつたでしよう？でも私はそこで生まれ育つたんです！これは何があつても変わりません！！」

感情が高まつて思わず大声を出してしまつた。やつぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。
びっくりしてそつちを見るとさつきまで黙秘を貫いていた少年が口

を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどつなの？異世界からきたの？」

「へ、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビックリしつつ答えると少年は

「じゃあちょっと待つてーすぐ戻るから。」

といつて部屋の奥に走つて消えていった。

残された私たち3人は呆気にとられないと宣言せりおりすぐ戻つてきた少年が1冊の本を手にしていた。

そしてものすごい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」

と言つた。

「アドルフ、それお前がめちゃめちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？」といつが言つてること嘘かもだぞ。

」

「うん。学校の先生にもらつた大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときにこの本をもらつた。異世界から来た人が書いたものらしいけど文字がここで使われるものと違つて読めないんだ。しかも不規則すぎて解説もできない。だから僕は異世界からきたつていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。

が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかつた。だつて異世界の人が書いた本だと！？完全に私と同パターングじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすじに勢いでそういうとアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ・・・。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思つとなんだか安心した。

「本当ー？じゃあ読んでー早く」

感動していたらせかされたので声に出して読み始める。

「えつと、『私がこの世界に來てもう2年は経つただり。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思つ。この世界に私が來たのはさつきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらこつちに來ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思

うどゾシとする。私はやせしい村の人たちに拾つてもらつていま
もここうやつて生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらつて
いる。感謝してもしきれない位だ。早く恩を返せるようになりたい
と思ひ。』　・　・　・　ページ田はこれでお終いです。』

読んでみて私とまったく同じだと思ひ。私も本当に一瞬でこつちに
来てしまったのだ。おなじでホツとする反面2年も戻れてないと書
いてあつたので落胆する。やつぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあつたのか・・・。ねえ続きも読んでー。」

「アドルフは信じてるみたいだけど俺はまだ信じてないからな。本
当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だつてあるんだ。」
よかつたわー。

「アドルフは信じてるみたいだけど俺はまだ信じてないからな。本
当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だつてあるんだ。」

「そういやまだ一人いたよ！しかも一番手ごわいのが。

鬼畜男さーん！まだいますか！－もついいぢやないですか。せつ
かく信じてもらえる雰囲気だつたのに台無しだよ。

でも、この男のいつてることも一理ある。実際私が読めている保証
などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証などどこにも無いです。でも本当に読
めています。信じてください」

私ができることなんて信じてくれといつだけだ。あーあせめてあつ
ちの世界のものを持ってきてたらな。証明になるの。いま証明な
んてできないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないかな？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろ。今の短時間で覚えるのは無理だったろうし。」

そういうアネットさんが紙とペンを差し出す。

・・・ナイスター・アネットさんも「あなた最高です。本当にありがとうございました」とおっしゃいました。

私は受け取った紙にペンで『私は異世界から來ました』と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思つていつもよりスラスラ書いてみました。

「……うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあつた。ドミニク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。」

アドルフくん！あなたも最高です！！

うおー！感無量ですわたくしー！とつとう全員が信じてくれました。長かった（？）戦いも終わりです。ありがとう鬼畜男！

「信じていいださうがといひにがまよ。」

「ベ、別に前のたまじかねえよ。」

・・・・・シナリオ・

4ページ（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないからいつもひじかましてるんですね（笑）読みにくかつたらいいってください。どうにかするので。

* * * * *

読んでくださってる方ありがとうございます。次での過去の話しが終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

5ページ（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。
やつぱー田に2回更新なんて無茶しようとするからですかね。。。

消えちゃつたけどがんばります。。。。。

よくやく3人に信じてもらひことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去つたから変わつたっちゃ変わつたがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってない。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらひことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだひ。早速聞いてみるか！

とそこまで考へて時に氣づく。
「私名乗つてなくね？名前こつてなかつたよ。一応言つた方がいいよね。」

「あの、今更なんですがいままで名乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字…？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言つ。え？貴族？つちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。こつちの世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができないんだ。ところでもう一回名前こつてもらえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子といいます。しょ・う・こ」

「ショウゴーウ？」

「いえ、しょ・う・こです。」

「ショーゴオ？」

・・・・・・・・・・・・
どうやら私の名前は、この世界では発音できないらしい。

「あ、じゃあシーツ呼べますかね？」

シーツっていうのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。
海 = sea = シーである。センスについては何もいわないでくれ。
考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にした
のだ。

「シーカー? れなり問題ないね。」

よかつた。友達よーこまこーどお前の努力が役に立つたぞーー!

さて、それてしまつたが本題に戻ろ。

「アネギトさん、このあたりで住み込みで働くといつぱりあります
んかね? 私でもできそうなもので。」

「え? 住み込みで働くのかい? ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、

一個あつたね。住み込みで食費免除で休日もあるといいが。

「ここその好条件！？好条件過ぎて怖いへりこどある。

「どうですかセリーネ？教えてください……。」

アネットセリーネはうと笑つて言つた。

「うーん、アネット食堂セリーネ。」

「うつして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあつたけど割愛。
決してめんどくさいからじゃない。決して。

さうに私がお約束の「」とくチートで魔力がいっぱいあつて制御に時
間食つたとか、その制御法を教えてくれたのがドミニクさんで結果
仲良くなつたとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこつちの
世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになつたとか、あつ
たけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃつたけど。

一応補足してもくとこまや私とドミニクはめりやくりや仲良し

だ。私は何があつたらまづドミニーケさんを頼るねつてへりい仲良くなれた。鬼畜男つて言つてたのが懐かしいくらいだ。

アドルフくんは王都に先月行つてしまつたが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オリジナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくは無い。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能（？）しつつ元の世界に変える方法を探しています！

5ページ（後書き）

おわった！過去編終わりました！！

データ消えた時は泣きたうでしたが無事過去編終わりました。

これから現在が始まるので読んでくださいといつれしゃです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8852y/>

召還者の異世界奮闘日記

2011年11月29日22時47分発行